

乳幼児期の発達に応じた環境設定 ——トイレットトレーニングからの考察——

Setting the Environment According to the Development of Infants and Toddlers in Infancy: Consideration from Toilet Training

大西 由美子

Yumiko Onishi

はじめに

厚生労働省「保育所保育指針解説」（平成30年）によれば、「乳幼児期は、生活の中で興味や欲求に基づいて自ら周囲の環境に関わるという直接的な体験を通して、心身が大きく育っていく時期」とされ、「保育所保育においては、子ども一人一人の状況や発達過程を踏まえて、計画的に保育の環境を整えたり構成したりしていくことが重要である」とされる。すなわち、保育所保育の特性は、「環境を通して乳幼児期の子どもの健やかな育ちを支え促していくこと」にある¹⁾。保育所保育は、設備、遊具などの物的環境、保育者や子どもなどの人的環境、自然や社会の事象などを含んだ「環境」を通して行われる。保育の環境は、こうした物的環境、人的環境などが相互に関連し合ってつくり出されていくものとされる。保育環境の設定（構成）は、子どもの健全な心身の育成、子どもの経験や生活の豊かさなどに多大な影響を及ぼすものである。この意味において、子どもの成長にふさわしい保育環境をいかに設定していくかということは、保育の質に深く関わる重要課題でもある²⁾。

子どもの発達段階に関して、「保育所保育指針解説」は、子どもを「乳児」、「1歳以上3歳未満児」、「3歳以上児」に区分し、子どもの「発達過程の最も初期に当たる」1歳未満の時期を「乳児期」としている³⁾。

保育所の保育環境には、生活環境としての登降園（所）、食事、睡眠・休息、排泄などのための環境がある。排泄（排尿）のための環境は、物的環境とそれに関わる保育者などから成る人的環境によって構成される環境であり、本論文では、これを「トイレ環境」と呼称する。保育者は、排泄（排尿）の自立に資するトイレ環境の設定において重要な役割を担うことになる。

本論文は、保育環境のうち、幼児の排泄、とりわけ排尿の自立に関わるトイレ環境の設定に焦点

を当てて、実務経験から得られた知見に基づき、考察上必要とされる先行研究の調査データ・分析結果を取り上げて、排尿行動の自立に資するトイレ環境の設定に向けて取組んでいる保育所における保育者の具体的なトイレトレーニングについて考察する。

乳幼児期における排泄習慣の形成

乳児期における子どもは、1歳近くなると膀胱の容積が増え、排尿の感覚も開いていき、排尿の際、乳児の表情に尿意のサインが現れるようになる。

幼児期に当たる「1歳以上3歳未満児」の時期において、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと基本的な運動機能が次第に発達し、排泄（排尿）の自立のための身体的機能も整うようになる。食事、排泄、睡眠、衣類の着脱および清潔という基本的な生活習慣のうち、「排泄」は、人間の生理的欲求を満たすための生活習慣であり、幼児期に身に付けさせたい生活習慣とされている。歩行と言語獲得が可能となるこの幼児期において、子どもは、「おむつ外し」のための訓練を通して、衝動をコントロールすることを学ぶことになる。この「おむつ外し」ないし排泄（排尿）の自立のための訓練が「トイレトレーニング」であり、この排泄（排尿）訓練によって、「自律機能の習得」が可能となる。子どもは、トイレトレーニングを通して、排泄（排尿）を自らの意志でコントロールする能力を身につけることになる⁴⁾。

幼児期におけるトイレ環境の設定と配慮事項

保育所の排泄のための環境、つまりトイレ環境は、具体的に、トイレの設備、トイレの内装などに具体化される物的環境と、それに関わる保育者と子どもから成る人的環境によって構成される。本来、物的環境と位置づけられる「トイレの内装」のうち、快適で温かみのある雰囲気づくり、プライバシー保護などは、保育者が主体的に関わることが期待される環境である⁵⁾。

トイレ環境設定のために配慮すべきこと

保育環境の設定に関して、「保育所保育指針」は、「保育所保育に関する基本原則」において、「保育所は、……人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう……計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」として、留意すべき4つの配慮事項を示している⁶⁾。「保育所保育指針」が示している「保育環境」設定時における配慮事項を、幼児の排泄（排尿）の自立に資するトイレ環境の設定という視点から捉え直すと、トイレ環境設定時に配慮すべきことは次の4つになる。すなわち、1) 子どもの興味や関心が触発され、子どもが好奇心をもって排泄（排尿）に自発的に関わりたくなるための配慮、2) 子どもが落ち着いて、くつろいだ気持ちで排泄（排尿）することができるための配慮、3) 子どもが排泄（排尿）時に安心して過ごせるための配慮、4) 排泄（排尿）の自立に向かう子ども自らが周囲の子どもと関わっていくことができるための配慮、これらである。本論文では、この配慮事項を評価のための視点および

基準として用いる。

トイレ環境の実態評価のための新たな視点と基準

本論文は、「保育所保育指針解説」が保育所保育のねらいや目標としている子どもの「自己肯定感」を育むことと、子どもの「生きる力」の基礎を育むことに着目して、それらをトイレトレーニング評価のための視点および基準として用いる。

「自己肯定感」の育成という視点

「保育所保育指針解説」は、子どもの「自己肯定感」の育成について言及し、子どもの「自己肯定感を育てていくことは、保育の大切なねらいの一つ」であり、「自分が、かけがえのない存在であり、周囲の大人から愛され、受け入れられ、認められていることを実感し、自己肯定感を育てていく」としている⁷⁾。この「自己肯定感」という概念は必ずしも明確ではなく、論者によって込められる意味やニュアンスによって次のような違いが生じている。すなわち、自己肯定感が自分の「いいところ」を評価して、自己を肯定するような意味で用いられている場合がある。この場合は、自己肯定感に近い概念として「自己有能感」という用語を用いて、「自分の可能性を信じ、自分はできるんだという自信をもち、肯定的に自己を認識すること」⁸⁾と説明される。これに対し、「存在レベルで自己を肯定する意味で用いている場合」⁹⁾がある。この場合、自己肯定感は「ありのままの自分を受け止め、自己の否定的な側面もふくめて、自分が自分であっても大丈夫という感覚である」¹⁰⁾と説明される。「自分が自分であって大丈夫」という意味の「自己肯定感」は、「できる」とか、有能だとか、役立つとか立たないというレベルのものではなく、それは、乳児のおむつ替えの際に養育者が発する「理解と赦しの『よし、よし』」にたとえられる概念だとされている¹¹⁾。

「保育所保育指針」は保育所保育の目標を実現する方法として、保育者に対し「子どもの自己肯定感が育まれるよう対応していく」ことを求めている。子どもの心の成長の過程を保育者が「見守り、受け止めることによって、子どもの自己肯定感が育まれていく」¹²⁾が、子どもの自己肯定感は身近にいる特定の保育者との共感的な一体性を追求する関係の中で育まれていくのである。「保育所保育指針解説」は、子どもの「自己肯定感」育成に向けて配慮すべきことを示している¹³⁾。「自己肯定感」の育成に関わる保育に向けて“配慮すべきこと”は、幼児が排泄（排尿）行動の自立に向かう訓練の場においても妥当するものである。こうして、保育者が実施している具体的なトイレトレーニングが「自己肯定感」を育むための配慮がなされたものになっているかについては、次の諸点から評価されることになる。1) 保育者は、排泄（排尿）訓練の場においても、子どもとの信頼関係の重要性を常に心に留めて子どもと関わるトイレトレーニングになっているか。2) 保育者は、排泄（排尿）行動の主体として子どもを認め、その人格を肯定・尊重する保育者の気持ちを（子どもが感じ取れるように）子どもに言葉・態度で伝えるトイレトレーニングになっているか。3) 保育者は、排泄（排尿）が思い通りにいかない場合の子どもの感情に対して、「悲しいね」「悔しいね」などと十分に時間をかけて受容的に受け止める援助を行うトイレトレーニングになってい

るか。これらの点から、実際のトイレットトレーニングを考察し、それが「自己肯定感」を育むための配慮がなされたものになっているかについての評価を行う。

「生きる力」の基礎養育という視点

「保育所保育指針解説」は、「乳幼児期は、生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期である」と位置づけ、この時期において、保育所の保育が乳幼児の「生きる力」の基礎が培われることを目標として行われるとしている。すなわち、保育所は、乳幼児期の子どもたちの「未来」を「長期的視野をもって……見据えた時、生涯にわたる生きる力の基礎が培われることを目標として、保育を行う」（傍点は引用者）として、「生きる力」の基礎養育に言及している¹⁴⁾。保育の重要な目的の一つが「生きる力」をもった子どもの基礎養育にあるとすれば、「生きる力」をもった子どもとは、「自立」のための諸能力の習得に向けて、主体的に生きていくことができる子どもと捉えることができる。

「生きる力」とは、第15期中央教育審議会「21世紀を展望したわが国の教育のあり方について」第1次答申（1996年7月）で示された概念を意味するものであり、それは、「知・徳・体のバランスの取れた全人的な力」であり、総合的な力ということになる¹⁵⁾。子どもが生涯にわたって生きていくために必要な力である「生きる力」は、乳幼児期においてその基礎が培われる。「生きる力」の基礎養育のためには、身体感覚を伴う多様な経験の積み重ねが必要とされ、それは排泄（排尿）訓練の領域においては、トイレットトレーニングを通して、好奇心、探求心、思考力などとともに養われることになる。

「保育所保育指針解説」は、乳幼児の「生きる力」の基礎養育に向けて配慮すべきことについて、「生涯にわたる生きる力の基礎が培われることを目標として、保育を行う……際、子どもの現在のありのままを受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応していくとともに、一人一人の子どもの可能性や育つ力を認め、尊重することが重要である」¹⁶⁾としている。このように「保育所保育指針解説」には、1) 子どもの現在のありのままを受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応すること、および2) 一人一人の子どもの可能性や育つ力を認め、尊重することが、「生きる力」の基礎養育に関わる保育に際して“配慮すべきこと”として示されている。この二つの配慮事項は、乳幼児が排泄（排尿）の自立に向かう訓練の場においても妥当するものである。こうして、保育所における保育者が実施している具体的なトイレットトレーニングが「生きる力」の基礎を育むための配慮がなされたものになっているかについては、次の諸点から評価されることになる。1) 子どもの排泄（排尿）行動の現在をありのまま受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応するトイレットトレーニングになっているか。2) 一人一人の子どもの排泄（排尿）の自立に向けての可能性や育つ力を認め、尊重するトイレットトレーニングになっているか。これらの点から、実際のトイレットトレーニングを考察し、それが「生きる力」の基礎養育のための配慮がなされたものになっているかについての評価を行う。

保育所トイレ環境の取組み事例についての評価・考察

以下において、先行研究が示すトイレ環境設定に関する代表的な取組み事例を取り上げて、保育者が実施している具体的なトイレトレーニングについての評価を行い、トイレ環境の実態を考察する。

1) 保育所のトイレの壁面に装飾を施す取組み事例

「幼児の排泄自立とトイレ環境・排泄援助」に関する先行研究の論文（2009年）において、トイレの壁面に装飾を施すというトイレ環境づくりに取組んでいる保育所の事例が示されている。当該保育所では、幼児が便座に座ったときに装飾が見える場所に、子どもの興味のあるキャラクターを季節ごとに装飾するという工夫がなされている¹⁷⁾。

評価

子どもの興味や関心を引き出すための日頃のトイレ環境の設定は、保育者の役割である。本事例は、保育者が子どもの興味や関心を触発するような工夫・取組みを行っており、子どもが好奇心をもって排泄（排尿）に関わりたくなるようなトイレトレーニングの実施例といえる。また、この試みには、装飾を見ながら排泄（排尿）できるため、気持ちが落ち着くりラックス効果もあり、子どもが落ち着いて、くつろいだ気持ちで排泄（排尿）することができるような工夫がなされているといえる。

2) トイレ内で子どもの排泄が終わるまで見守るという取組み事例

(a)前掲論文（2009年）において、「保育士もトイレ内に入り、着脱や排泄を近くで見守り、子どもの状態や様子をすぐに把握できるようにしている」¹⁸⁾ という取組みの事例が示されている。

(b)「保育所における排泄の習慣形成」に関する先行研究の論文（2006年）では、保育者が幼児の排泄習慣形成のために具体的に実施している取組みに関する調査結果において、調査対象の保育者254名中の半数（50.0%）が「トイレの個室で排泄が終わるまで見守る」と回答したに過ぎないことが示されている¹⁹⁾。

評価

事例2) (b)の「トイレの個室で排泄が終わるまで見守る」との回答数が50%に過ぎないというのがトイレトレーニングの実態を表したものであるとすれば、それは、「子どもが落ち着いて、くつろいだ気持ちで」「排泄（排尿）時に安心して過ごせるような配慮がなされているか」という視点からは、問題視される実態であるといえよう。これがトイレ環境の実態であるとしたら、当該保育所には、子どもの安心感と保育者に対する信頼感の得られるトイレ環境の設定・整備が求められることになるであろう。

3) 異年齢児を混合縦割りクラス編成にするという取組み事例

前掲論文(2009年)において、保育所が1歳児クラスと2歳児クラスを混合クラス編成に改編して、1歳児が2歳児クラスの排泄(排尿)の様子を日常的に見ることができる工夫を試みるという事例が示されている²⁰⁾。

評価

本事例においては、排尿行動の自立に向かう子ども自らが周囲の子どもと関わっていくことができる環境設定が試みられている。年下の子どもが年上の子どもの排尿の様子を日常的に見ることができる環境づくりへの取組みは、「排泄の自立に必要な情報を獲得するためには『見る』動作が重要である」²¹⁾とする視点からも、肯定的な評価がなされることになる。また、幼児の排泄(排尿)の習慣づけについては、幼児の「模倣」性に注目する必要があるだろう。すなわち、幼児期の子どもの場合、「あらゆる行動の習慣において模倣がきわめて重要な役割を演じて」²²⁾おり、子どもの生活には模倣の傾向が色濃く表れる。子どもは、乳児期からまわりの人がやっていることを模倣することによってそれを覚えていく。幼児は、模倣の働きによって、周りの生活に自分を合わせることをしながら、自分の生活を作っていく。排泄を含む基本的な生活習慣の形成は、この幼児の模倣性を抜きにして考えることはできないといえよう²³⁾。

4) 排泄が上手くできた時に子どもの達成感や喜びを共感する態度を示すという取組み事例

前掲論文(2006年)は、調査対象の保育者254名中の91.3%が「排泄が上手くできた時には、ともに喜びを認める」と回答したことを示している²⁴⁾。

評価

本事例については、「自己肯定感」の育成という視点から、保育者は子どもとの信頼関係の重要性を常に心に留めて子どもと関わるトイレトレーニングを行っていることが求められる。また、「生きる力」の基礎養育という視点からは、保育者は、子どもの排尿行動の現在をありのまま受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応するトイレトレーニングを行っていることが求められる。以上の2つの視点から、当該保育者の配慮は肯定的に評価されることになる。このように、保育者は、排泄(排尿)訓練の場において、子どもができるだけ「自分でできた」という経験を得るようにすべきである。そこでは、『できた!』という瞬間を捉え、『やったね!』『できたね!』と声をかけ、子どもの達成感や喜びを共感する。そのような経験を多く積み重ねることができると子どもの意欲と自信は増していく²⁵⁾ことになる。

5) 失敗しても決して叱らず気長に前向きに対応するという取組み事例

前掲論文(2006年)は、調査対象の保育者254名中の90.2%が「失敗しても決して叱らず気長に前向きに対応する」と回答した調査結果を示している²⁶⁾。

また、「幼児の失敗場面での保育者の関わり方」に関する先行研究(2014年)においては、幼児の排泄の失敗に対し、保育者が「失敗した幼児の視点からの幼児の思いを代弁するような言葉かけを

している」事例、「『もう少しだったね』というように肯定的な表現で幼児に声かけを行っている」事例などが示されている²⁷⁾。

評価

本事例については、「自己肯定感」の育成という視点から、保育者は、排尿行動の主体として子どもを認め、その人格を肯定・尊重する保育者の気持ちを（子どもが感じ取れるように）子どもに言葉・態度で伝えるようなトイレトレーニングを行うことが求められる。同様に、保育者は、排尿が思い通りにいかない場合の子どもの感情に対して、「悲しいね」「悔しいね」などと十分に時間をかけて受容的に受け止める援助を行うようなトイレトレーニングを行うことが求められる。これらの「自己肯定感」の育成という視点から、当該保育者の配慮には肯定的な評価が与えられることになる。

また、「生きる力」の基礎養育という視点から、保育者は、子どもの排尿行動の現在をありのまま受け止め、その心の安定を図りながらきめ細かく対応するトイレトレーニングを行うことが求められる。その場合、「生きる力」の基礎養育における「一人一人の子どもの個性を尊重する」という要請については、尿意に対する敏感さには個人差があり、排尿の自立が達成される年齢は子どもによって大きな差が生じるということを考慮に入れる必要がある。また、近年、紙おむつの普及により養育行動は大きく変化して排泄（排尿）の自立が以前より遅くなっているということも考慮に入れる必要がある。これらを考慮に入れた場合、「生きる力」の基礎養育という視点からも、当該保育者の取組みは肯定的に評価されることになる。

子どもは、排泄（排尿）を含む生活習慣を大人の温かい配慮を受けて、多くの失敗経験を積み重ねながら少しずつ身につけていくのである。排尿に失敗をしても、さりげなく受けとめてもらえ、必要な時はいつでも助けてもらえるという安心感が、子どもの積極性を引き出すことになる。こうして、排尿行動の自立に資するトイレ環境設定のためには、保育者と子どもの“信頼関係”がしっかりと育まれていることが求められる。この信頼関係の形成・確立こそがトイレトレーニングを成功に導くための最重要の課題とされる。

おわりに

本論文が取り上げたトイレトレーニングの事例のうち、子どもが排尿に失敗しても決して叱らず気長に前向きに対応するという保育者の取組み事例が、「自己肯定感」の育成という視点からも、「生きる力」の基礎養育という視点からも、肯定的に評価される事例であることが確認された。この事例が示唆することは、排尿行動の自立に資するトイレ環境設定のためには、保育者と子どもの信頼関係がしっかりと築かれていなければならないということである。子どもの排泄（排尿）習慣の形成・確立のためには、信頼できる大人の存在が欠かせない。家庭から離れた子どもが保育者を支えにして、保育者との間の固い信頼関係を基礎にして、初めて経験する集団生活の中で自己表出できるようになり、保育所での排泄（排尿）を含む生活習慣の形成が確立されていくことになる。

保育所の長時間保育を利用する子どもにとって、保育者との関わりは一日の大半を占めており、保育者は、子どもにとって、排泄・食事・衣類の着脱といった生活の中で必要不可欠な支援者となる。子どもの成長を目の当たりにすることができる保育者は、子どもとの信頼関係も築きやすい。家庭以外での「愛着（アタッチメント）」形成には、特定の大人である保育者との関わりが特に重要であり、保育を行う中で意識的に子どもと関わって「愛着」関係を形成することが保育者の重要な役割となる。この点に関して、「保育所保育指針解説」は、乳幼児期の子どもの場合、身近な保育者との「愛着」が拠りどころとなって他者とのコミュニケーション能力の基礎を培っていくことを認めて、次のように指摘している。すなわち、乳幼児期の子どもは、「身近な保育士等との愛着を拠りどころにして、少しずつ自分の世界を拡大していく。人への基本的信頼感に支えられ、また生活や遊びへの気持ちが高まる中で……子どもは人と関わり合うことの楽しさや一緒に過ごすことの喜び、安心感といったものを味わう。こうした経験が、人と関わる力の基礎を培っていく」²⁸⁾ ことになる。

今日、育児は、親だけの仕事ではなく、家族または地域ひいては社会全体の責任の下に行われるべきであると考えられている。この「子育ての社会化」という状況において、子育ての中心を担うべきなのは保育所における保育者ということになる。保育者には、子どもにとってエンズワースのいう（不安な時にいつでも駆け込み、保護してもらうことのできる）「安全基地」となる役割が課せられることになるであろう。

本論文の考察によって、保育所における保育者は、排尿行動の自立に資する「トイレ環境」設定（構成）のために有効なトイレトレーニングを実施していることが確認された。この有効なトイレトレーニングを基礎づけている保育者の取組みが、子どもとの信頼関係、言い換えれば、「愛着」関係の構築に資する取組みであった。子どもとの間に適切な「愛着」関係を構築するためには、（毎日複数の保育者が入れ替わりながら関わるのではなく）特定の保育者が1人の子どもに継続的に関わる環境設定が望ましい。このことは、排尿行動の自立に向けてのトイレトレーニングの視点からも課題とされることである。

引用文献

- 1) 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説*. フレーベル館. (p.15).
- 2) *前掲書*. (p.24).
- 3) *前掲書*. (pp.86-87).
- 4) 佐々木正美. 子育ての心理学－自立心を育てるトイレトレーニング－幼児期前半2（1歳半～4歳ころ）.
〈<http://mindsun.net/sasaki/erikson06.htm>〉 (2022年8月24日12時45分)
- 5) 和田幸子・山崎玲奈・下口美帆. (2020). 保育における優れた物的条件づくりへの基礎. *京都光華女子大学短期大学部研究紀要*, 58, 51-52.
- 6) 厚生労働省. (2017). *保育所保育指針* (平成29年厚生労働省告示第117号). フレーベル館. (p.6).
- 7) 厚生労働省. (2018). *前掲書*. (p.36 p.101).

- 8) 田島賢侍・奥住秀之. (2013). 子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討－肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて－. *東京学芸大学紀要*, 19-21.
- 9) 高垣忠一郎. (2009). 私の心理臨床実践と「自己肯定感」. *立命館産業社会論集*, 45-1, 6.
- 10) 田島賢侍・奥住秀之. (2013). 前掲論文. 21.
- 11) 高垣忠一郎. (2009). 前掲論文. 10.
- 12) 厚生労働省. (2018). *前掲書*. (p.19 p.21 p.37).
- 13) *前掲書*. (pp.36-37) (p.143).
- 14) *前掲書*. (p.18).
- 15) 原子 純. (2016). 子どもの遊びが育む「生きる力」. *尚美学園大学総合政策論集*, 23, 64.
- 16) 厚生労働省. (2018). *前掲書*. (p.18).
- 17) 村上智子. (2009). 保育園における幼児の排泄自立とトイレ環境・排泄援助の影響. *東北文教大学短期大学部紀要*, 2, 34-35.
- 18) 前掲論文. 28.
- 19) 金山美和子. (2006). 幼稚園・保育所における排泄の習慣形成に関する考察－保育者の意識調査から見た幼児の援助と家庭連携について－. *上田女子短期大学児童文化研究所報*, 28, 18.
- 20) 村上智子. (2009). 前掲論文. 31.
- 21) 山藤宏子. (2016). トイレトレーニングにおける排泄自立へ向けた幼児の行動特徴. *早稲田大学人間科学学術院人間科学研究*, 29, 39.
- 22) 山下俊郎. (1970). 幼児の生活指導. フレーベル館. (p.134).
- 23) 松田純子. (2014). 幼児期における基本的生活習慣の形成－今日的意味と保育の課題－. *実践女子大学生生活科学部紀要*, 51, 70.
- 24) 金山美和子. (2006). 前掲論文. 18.
- 25) 松田純子. (2011). 幼児の生活をつくる－幼児期の「しつけ」と保育者の役割－. *実践女子大学生生活科学部紀要*, 48, 99.
- 26) 金山美和子. (2006). 前掲論文. 18.
- 27) 吉武久美子・浦川麻緒里・松瀬美穂. (2014). 幼児の失敗場面に対する、保育士の言葉かけや関わり方に関する検討. *公益社団法人日本心理学会大会発表論文集*, 78, 1117.
- 28) 厚生労働省. (2018). *前掲書*. (p.135).

参考文献

- 玉井美知子. (2007). 育ち合い－基本的生活習慣の自立をめざして－. *日本教材文化研究財団研究紀要*, 37.
- 谷田貝公昭・高橋弥生. (2008). 基本的生活習慣の発達基準に関する研究. *日白大学短期大学部研究紀要*, 45.
- 平野美沙子. (2013). アタッチメント(愛着)形成と、保育の役割. *静岡産業大学論集*, 19.
- 中西雪夫. (2018). 乳幼児の基本的生活習慣の形成に関する研究－排泄習慣習得のための親の取組みの実態－. *佐賀大学教育学部研究論文集*.
- 今津 香. (2022). 乳児期の「自己肯定感」の研究. *神戸教育短期大学紀要*, 3.

塩谷 香. (2022). 本当に考えるべきは「待機児童の解消」なのか。－改めて問う保育のあり方－. 國學院大學メ
ディア.

謝 辞

本論文作成にご尽力とご協力いただきました本学幼児教育研究所の野畑健太郎所長と梶原育子所
員に心より感謝申し上げます。